

知られざる保険会社 (2)日清生命

今年は明治 150 年ということで、いくつかのビジネス雑誌でも歴史に学ぶといった特集が組まれている。ビジネス誌ではないが、『東京人』という雑誌では、「明治を支えた幕臣・賊軍人士たち」という特集で、近代化・工業化を支えた敗者の人材にスポットライトを当てており、大変興味深い。

明治維新は、武士の支配による封建体制から、明治政府による近代国家に転換したという意味でまさに「革命」であったことは確かであるが、同時に、その最終局面においては、敵味方ともに近代化という共通認識をもった「挙国一致」を目指したものだだったと見えなくもない。勝海舟と西郷隆盛の合意は、そのことを除いては考えられない。その後批判された藩閥政治は、勝者の利権が無視できないほど大きかったことを示すものではあるが、明治政府は、近代知識を備えた人材を敵味方の区別なく大切にすることも事実である。幕末初期は、江戸幕府こそ近代化の先兵であった。そのため松本良順や榎本武揚をはじめとして西洋の知識やスキルを持った幕臣・賊軍人が多く、彼らの多くは明治政府で活躍した。

幕臣の活躍した産業分野に偏りがあるのが興味深い。明治維新の敗者の人材は、ジャーナリズムや保険などの非製造部門や軍人、教育の分野に多かった。ジャーナリズム初期の福地桜痴、成島柳北は幕臣、陸軍の柴五郎、教育の朝河貫一などはそれぞれに維新における敗者から出発した人々である（石光真人編著『ある明治人の記録、会津人柴五郎の遺書』中公新書、阿部善雄『最後の日本人、朝河貫一の生涯』岩波現代文庫）。

わが国の生命保険史に名を残す「共済 500 名社」には、多くの幕臣が参加していた。最終的には失敗に終わったが、近代的な生命保険会社の設立を日本で最初に試みた若山儀一も、岩倉使節団に同行した旧幕臣であった。幕臣と保険の関係については別稿にゆだねることにして、今回は、11月に続いて戦前の知られざる保険会社を一つ紹介したい。

今回、紹介するのは日清生命である。同社は、明治 40 年 1 月設立され、昭和 16 年 10 月に仁壽生命（明治 27 年 9 月設立）とともに野村生命に合併された。戦後の東京生命の前身会社のひとつである。

稲見泰治著『保険はどこへ』文雅堂（1929）では、「早稲田は何事にも慶應と対抗したが。慶應の関係者が生命保険会社を作ったので早稲田の関係者も急に作りたくなかった」と紹介されている。稲見によれば、設立事情は次の通りである。「明治 39 年侯爵大隈重信、早大総長法博高田早苗、我国実業界の巨頭子爵渋沢栄一、本邦郵政の創始者男爵前島密氏等の発意により、早稲田学園出身実業家相寄り日支両国に亘る一大生命保険を興すの急務なるを認め早大校賓校友の援助と財界 40 餘名の賛同の下に資本金壹百万円を以て株式会社を組織し、40 年 3 月 1 日営業を開始せり。」

慶應の関係者が作った生命保険会社とは、直前の明治 37 年に設立された千代田生命のことである。千代田生命が第一生命に続くわが国第二の相互会社として発足したのに対して、日清生命は伝統的な株式会社として設立された。設立 6 年後の明治 45 年の株主構成に

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」052

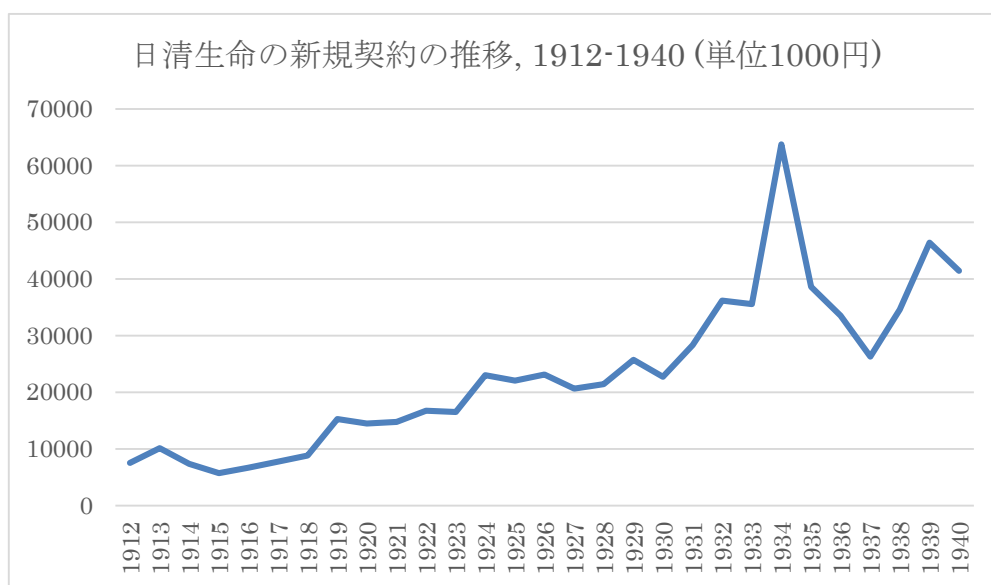
よれば、大隈重信、前島密、高田早苗、渋沢栄一など発起人をはじめ、池田龍一、増田義一、田中穂積などの早大関係者の他、大阪や横浜の実業家が大株主に名を連ねている。確かに早稲田大学関係者が主要な株主であるが、竹原荘治郎、竹原友三郎、曾野作太郎などの関西の株式仲買人等も大株主であった。とりわけ竹原荘治郎は 589 株を保有し、最大株主であった。「純三田系」と称された千代田生命と比べれば、日清生命は所有構造から見て「純稲門系」とは言い難い。

稲見は、日清生命について次のように評価する。「遺憾なことには早大出身の実業家は慶應に優勢でない。それに最初の社長が前島密氏で、次が中野武宮氏であって慶應の塾長であった門野幾之進氏が自ら出でて千代田の社長になったに比すれば早稲田系の力の入れ方も足りなかった。斯様な次第で折角出来ても早稲田系の日清は慶應系の千代田に到底及ばず今尚脚下にも寄り付けない状態」である。さらに「野球では勝っても保険ではまだ早稲田は到底慶應の敵ではない」と結ばれている。

しかしながら、設立とともに急成長を遂げ、大正時代には五大生命の一角を占めた千代田生命と比較するのは少々酷なことである。同社の営業報告書から作成した新契約の推移を示した図をご覧いただきたい。前回紹介した仁壽生命が、昭和恐慌期を境に衰退したのに対して、日清生命は、中小生命保険会社にとって厳しい競争環境であるといわれる昭和恐慌後も成長をつづけている。同社の新契約が減少するのは、昭和 9 年に新契約を急増させた後のことであった。業績でみるかぎり、同社は中堅生命保険会社としてますます健闘した部類にはいるだろう。

ところで洋の東西を問わず、生命保険会社は社屋の壮麗にすることで、社会的な評判を獲得しようとする傾向にある。同社も仁壽生命と同じく社屋の建設に熱心であった。大正 6 年に佐藤功一の設計で建設された本社は、和風の伝統を石や煉瓦の本格的建築に活かした作品である（掲載の絵葉書を参照）。ちなみに佐藤功一は、早稲田大学に建築科を創設し、大隈講堂の設計者として知られる建築家である。日比谷公会堂や津田塾大学本館、武蔵大学講堂の他、保険会社では東京動産火災（現あいおい損保）関連の設計を担当した。

残念ながら、ユニークな日清生命本社の社屋は、関東大震災で被災したため、現存していない。同社は、昭和 5 年 5 月より社屋の新築に着手し、昭和 7 年 10 月に新社屋の落成を見た（掲載の絵葉書を参照）。この新社屋は、現在の大手町野村ビルにその面影を残している（画像を参照）。新築後の商品改定による販売促進によって昭和 9 年には新契約の目覚しい伸展がみられたが、その後は業績が不振となり最終的には野村生命に吸収されるに至ったのである。



日清生命『事業報告書』第6回（明治45年）から第34回（昭和16年）より作成。



日清生命大正 6 年に新築の社屋と大隈重信



日清生命昭和 7 年に落成した新本社。



日清生命社屋の面影を残す大手町野村ビルのファサード（著者撮影）。